『ケンブリッジ・ガゼット：グローバル戦略編』
第8号（2009年12月）

1. Cambridge Gazette: グローバル戦略編第8号
2. 情報概観—マクロ経済、資源・エネルギー、環境、外交・安全保障
3. 編集後記

1. Cambridge Gazette: グローバル戦略編第8号
「米国の凋落」という言葉を巷間耳にして久しい。本学の或る教授が筆者に向かって次のように語った—「ジェン、多くの人が『米国の凋落』と危機感を煽り立たている。しかし高齢の私からみればこのような時代は過去に何度もあったのだよ」と。確かに過去において「米国の凋落」が何度も叫ばれたなか米国は復活してきた—1971年のニクソン・ショックや1985年のプラザ合意といった時期にも「米国の凋落」を唱える人が数多くいた。また1991年の冷戦終結直後、「ソ連に代わり日本が米国に対する挑戦者になるやも…」という不安さえ米国の知識階級の中にも生まれた。こうして考えてみると「米国の凋落」は不用意に飛びつける結論ではないことが理解出来よう。むしろ我々が正視すべき課題は、「衆智」を集め「米国の復活」の可能性を考えることではないだろうか。いや、我々日本人は「日本の復活」と良好な「日米関係」をより真剣に考えるべきではないか。

世界的な秩序を模索していた1970年代半ば、本学を含む米国の最先端の研究者達は「衆智」を集める努力を学術雑誌International Organization第29巻第1号(1975年)に結集させた。即ち現在ピーター・ソン国際経済研究所(PIIE)所長を務めるフレッド・バーグステン氏は、ジョセフ・ナイ教授やロバート・コーエン教授と共に“International Economics and International Politics: A Framework for Analysis”を発表し複雑化した国際経済の分析手法に再検討を加えた。またリチャード・クーパー教授は“Prolegomena to the Choice of an International Monetary System”を著した。今、30年以上も前に書かれた知人の論文を再読しつつ、筆者は彼等に対する敬意を新たにしている。

2. 情報概観
マクロ経済: Macroeconomics—Books, Papers, and Articles
International Monetary Fund (IMF), 2009, Regional Economic Outlook, Asia and Pacific: Building a Sustained Recovery, Washington, D.C., October.
戦争の前線と敵を戦争の最後まで戦い続ける。そこで真の敵を我々の参謀本部の中に見出すことになる。

If intercommunication between events in front and ideas behind are not maintained, then two battles will be fought—a mythical headquarters battle and an actual front-line one, in which case the real enemy is to be found in our own headquarters. (J.F.C. Fuller, a British general)
機會から没落への距離は片歩に過ぎない。私は、最も重大な状況において、どんな大きな事件も勝利から没落への距離は片歩に過ぎない。— ナポレオン


